看護大学生の国際看護活動に関する意識および教育ニーズに関する調査

久保宣子・山野内靖子・蛭田由美

要旨

本研究の目的は，学生の国際看護学に関する学習ニーズやイメージする国際看護活動の在り方，授業内容および獲得を期待する国際看護活動を明らかにすることである．調査結果から，海外渡航の経験や外国語検定の資格の有無に関わらず，外国語の会話力の自己評価からは，外国語を学びたいと思っている学生についての支援策が必要なことが示唆された．また，国際交流および海外の保健医療看護事情について関心をもっていることや期待する授業内容について明らかになった．海外研修に参加する際は，参加型や行動型のアクティブな研修内容を希望していた．多国籍の人々へのヘルスケアに対応できる人材育成の有力な手段が示唆された．

キーワード：国際看護，看護大学生，意識調査

Ⅰ．はじめに

在日・訪日外国人も多くなり，日常的に多国籍の人々へのヘルスケアが求められ，グローバル社会における人材育成が急がれている．中央教育審議会は，培う学士力として，多文化・異文化に関する知識の理解を位置付けた[1]．その後，文部科学省は，学士課程における看護系人材養成として国際性豊かな人材養成を目指すこととした[2]．国の方針を受けて，全国の看護師等学校養成所では大学・短期大学・専門学校それぞれに教育課程の中に「国際看護学」関連の教科目を位置付けて授業を展開している．学生を対象とした国際看護学関連の授業後の学習成果や国際交流活動に関する意識調査等が行われている．林らの研究は，国際医療協力の看護領域におけるリーダーを育成する上で大変示唆に富む成果であったが，大学院修士課程における教育プログラムの提案であった[3]．中越らは，わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状を調査しその課題を明らかにした[4]．

我々は，今後の看護基礎教育における国際看護学教育の課題を検討することを目的に「文献から考察する看護基礎教育における国際看護学の現状[5]」というテーマで文献分析をおこなった．その結果，国際看護学に関する基礎教育では，コンピテンシーモデルの構築および能力開発という点で，いまだ不十分であることが推測された．

これからの看護は，互いの生活している文化に敬意を払いつつグローバルにどう協力していくかが重要となる．国際看護学では，格差や文化の課題を抱えている．学生の国際看護学に関する学習ニーズやイメージする国際看護活動の在り方，授業内容および獲得を期待する国際看護活動を

明らかにすることは，国際看護学のコンピテンシーモデルの構築および能力開発になることが期待される．

Ⅱ．研究目的

学生の国際看護学に関する学習ニーズやイメージする国際看護活動の在り方，授業内容および獲得を期待する国際看護活動を明らかにすることである．

Ⅲ．研究方法

１． 研究デザイン

本研究は，実態調査による量的記述研究である．

２． 調査対象

調査は，2016年４月時点におけるA大学看護学科１年生68名を対象とした．

３． 調査内容とデータの分析方法

調査内容は著者らが作成した質問用紙による自記式質問紙である．調査項目は，集計を行って，現状を量的に記述した．

４． 調査方法及び調査期間

調査票に研究目的と調査への協力を依頼する文書を添付すると同時に研究者が口頭で説明した．調査は授業の空き時間あるいは終了時を利用し，一斉に配布・回収した．無記名であるため，回収後の辞退はできないことを説明した．調査は無記名で行い，調査の匿名性を守ること，記入を望まない項目は無記入でよいこと，調査への協力を辞退することによる不利益は一切ないことを説明し，また調査依頼書にも明記した．

５． 倫理的手続き

本研究は，八戸学院大学・八戸学院短期大学研究倫理審査委員会に審査をうけ承認を得て実施した．対象者には，研究趣旨と方法について説明し承諾を得た．具体的内容は，研究の趣旨，参加の自由，匿名性の保持，データの秘密厳守などについて口頭と書面にて伝え同意を得た．

Ⅳ．結果

対象は68名で，回収部数は68で回収率は100%であった．男性10名(14.7%)，女性58名(85.3%)であった．

１． 海外に関する経験と外国語の学習経験

海外へ行った経験の有無については，海外渡航の経験の有無では，13名(19.1%)の大学生が有と回答した（表１）．海外へ行った経験があると答えた学生に海外での経験項目を質問したところ17の回答が得られた．多い順に，海外研修(7)，海外旅行(6)，海外留学(2)，国際協力活動(2)であった．外国語の会話能力を４段階で質問した．「とても話せる」「すこし話せる」合わせて12名(17.6%)，「あまり話せない」「全く話せない」合わせて66名(82.2%)であった（表2）．外国語会話や外国語検定の資格の有無について質問したところほぼ半数に分けられた．外国語を学習する機会を望む学生は11名(16.1%)であった．学校の授業以外に外国語を学習する機会を持つ学生は９名(13.2%）であった．

２． 海外への関心と授業への期待

国際交流および海外の保健医療看護事情について関心をもっていることを13項目の選択肢の中から複数回答を求めた．回答の多かった順に，「世界の看護の現状の理解」54名(19.3%)，「国際協力を行う上で看護職に必要とされる能力の習得」35名(12.5%)，「世界の健康問題の理解」33名(11.8%)，「諸外国の先進的な医療システムの理解」32名(11.5%)，「諸外国の社会・経済・教育・文化的な相違の理解」27名(9.6%)，「世界の中で日本の看護職の協力の現状の理解」26名(9.3%)，「国際協力における日本の貢献についての理解」21名(7.5%)，「途上国の人々の健康に影響を与える要因の理解」21名(7.5%)，「国際協力活動に参加するための方法の理解」14名(5.0%)，「国際協力の関係機関の活動内容の理解」８名(2.9%)，「プライマリーヘルスケアの取り組みの理解」6名(2.1%)，特になし２名(0.7%)，その他０名(0%)

であった(表 3).

国際看護学関連の科目で期待する授業内容について，13 項目の選択肢の中から複数回答を求めた．回答の多かった順に，「子どもの健康と環境」43 名(14.5%)，「先進国の進んだ医療技術・システム」40 名(13.5%)，「地震・津波等の自然災害時の緊急支援」36 名(12.2%)，「感染症とパンデミック危機」34 名(11.5%)，「貧困と教育と健康の格差」30 名(10.1%)，「紛争と難民と健康問題」24 名(8.1%)，「在日外国人の医療相談・支援」22 名(7.4%)，「途上国における出産事情と任産婦死亡率の改善」22 名(7.4%)，「産育習俗と妊産婦及び新生児の生命の危機」17 名(5.7%)，「国際協力活動に参加するための方法」14 名(4.7%)，「経済開発・産業発展と環境・健康問題」9 名(3.0%)，「特になし」4 名(1.4%)，「その他」1 名(0.3%)であった(表 4).

科目授業においてどのような学習方法を希望するか 8 項目の選択肢の中から複数回答を求めた．回答の多かった順に，「VTR，DVD，スライド，映画等　視聴覚教材」56 名(21.6%)，「教員による講義」55 名(21.2%)，「国際協力等の経験のある外部講師による講義・講演」49 名(18.9%)，「大学生の GW」33 名(12.7%)，「研修旅行」28 名(10.8%)，「大学生のプレゼンテーション」25 名(9.7%)，「演習」11 名(4.2%)，「その他」2 名(0.8%)であった.

3． 海外研修への意識

在籍する大学が企画している海外研修の認知について質問した結果，海外研修があることは 66 名(97.0%)の大学生が知っていた．その海外研修に関心があるか質問したところ，「ある」34 名(50.0%)，「ない」8 名(11.8%)，「どちらともいえない」24 名(35.3%)，「無回答」2 名(2.9%)であった．その海外研修に参加を「希望する」は 31 名(45.6%)，「希望しない」17 名(25.0%)，「どちらともいえない」20 名(29.4%)であった(表 5).

海外研修の内容の希望について 11 項目の選択肢の中から複数回答を求めた．回答の多かった順に，「医療福祉施設の訪問・見学」39 名(13.5%)，「ボランテイア活動」37 名(12.8%)，「現地の人や大学生との交流」35 名(12.2%)，「文化体験」32 名(11.1%)，「訪問先国の医療・福祉・看護事情に関するレクチャー」29 名(10.1%)，「スポーツ交流」27 名(9.4%)，「訪問先国の医療施設における実習」26 名(9.0%)，「ホームステイ」25 名(8.7%)，「国際協力機関の訪問・見学」19 名(6.6%)，「語学研修」18 名(6.3%)，「その他」1 名(0.3%)であった(表 6).

4． 海外での活動への将来的な希望

将来の海外活動を「希望する」13 名(19.4%)，「希望しない」28 名(41.8%)，「わからない」26 名(38.8%)であった (表 7).

将来希望する活動内容について 8 項目の選択肢の中から複数回答を求めた．回答の多かった順に，「医療看護研修」11 名(27.5%)，「語学の習得」10 名(25%)，「看護師免許の取得および就職」9 名(22.5%)，「国際協力活動」5 名(12.5%)，「在日外国人の医療看護活動」3 名(7.5%)，「海外の研究者との共同研究」1 名(2.5%)，「海外の大学又は大学院への進学」1 名(2.5%)であった(表 8).

Ⅴ．考察

1．県平均より高い経験値と言葉の壁

法務省の 2015 年住所地別出国日本人の年齢及び男女別の統計 [6] によると，住所地が青森県の 15～19 歳は男 589 名，女 1040 名の合計 1629 名が出国している．これは，青森県の 15～19 歳人口 31176 人のおよそ 5.2%が出国していることになる．また，同様に 20～24 歳でみてみると男 955 名女 1827 名が出国している．これは，青森県の 20～24 歳人口 25925 人のおよそ 10.7%が出国している

ことになる．今回の調査では，海外へ行った経験の有無については，約２割があると答えていた．このことは，青森県の同世代の平均より海外へ行った経験が高いことが示されており，集団の特徴といえる．経験項目は，半数以上が海外研修と海外旅行であり，理由はあきらではないが海外に関する研修や旅行などの機会を多く得てきたことが予測され，海外への関心が高い背景になることが示唆される．

外国語の会話する力については，「あまり話せない」「全く話せない」と認識している大学生が８割を超えていた．半数以上が外国語会話や外国語検定の資格を何か持っているにもかかわらず，会話する力については自信のなさがうかがえる．一方で，「学校の授業以外に外国語を学習する機会がほしい」と希望する者が２割弱いることから，外国語の学習に興味関心がある学生の存在が推測される．調査結果から，外国語会話に自信はないが，外国語の学習に興味関心がある学生の姿がみてとれる．会話は，日常的に使われるコミュニケーション手段である．看護学実習において，患者とのコミュニケーション能力を自己の課題にあげる学生は多い．コミュニケーション手段は，メッセージを表現するための装置である．表現するにあたり言語的要素と非言語的要素にわけられるが，会話は言語的要素であり最も頻繁に使う表現装置である．国際看護学を学ぶにあたり，言葉の壁がコミュニケーションの壁と捉えてしまわないように，学習支援していくことの必要性が示唆される．海外渡航の経験や外国語検定の資格の有無に関わらず，外国語の会話力の自己評価からは，外国語を学びたいと思っている学生についての対応策が必要であると推察される．

２．多文化・異文化の理解と期待する授業

国際交流および海外の保健医療看護事情について関心をもっていることとして「世界の看護の現状の理解」「国際協力を行う上で看護職に必要とされる能力の習得」「世界の健康問題の理解」「諸外国の先進的な医療システムの理解」などが関心の高い項目としてあげられた．特に，「世界の看護の現状の理解」は２割を占め最も多く，看護を志して入学してきた学生の一面が感じられる．国際看護は，国や地域，民族間の保健医療・健康・看護の格差是正と多様な文化・価値観共存とを究極の目的として，一国の看護職者だけでは解決できない看護や保健上の問題，および世界共通の看護課題に取り組む学問[7]である．自国以外の保健事情や生活，教育に関心を持ち，看護の役割として，疾病予防・健康教育の必要性を認識できることは，中央教育審議会が学士力として唱える多文化・異文化に関する知識の理解につながっていくことが示唆されている[5]．国際看護学では，格差や文化の問題を取り扱う．これらのことから，学生が高い関心を示している「世界の看護の現状の理解」「国際協力を行う上で看護職に必要とされる能力の習得」「世界の健康問題の理解」「諸外国の先進的な医療システムの理解」に焦点をあて，国際看護学の授業をすすめることは効果的であると考える．また，「国際協力を行う上で看護職に必要とされる能力の習得」に高い関心を示していることは，国際看護活動能力の習得に期待をもっていることを表している．そのために，世界の看護の現状を理解したいと考えていることが推察される．さらに，コミュニケーション場面においては，メッセージの解読にあたっても，その人が持つ知識やコミュニケーション技能，社会的・文化的背景が影響する[8]とされる．コミュニケーション能力に課題を感じる学生が多い中，多文化・異文化に関する知識を得て，他者の社会的・文化的背景の理解をすすめることは，コミュニケーションスキルの向上が期待できる．

国際看護学関連の科目で期待する授業内容

について，13 項目の選択肢の中から複数回答を求め，多い順に「子どもの健康と環境」「先進国の進んだ医療技術・システム」「地震・津波等の自然災害時の緊急支援」「感染症とパンデミック危機」などの回答が得られた．「子どもの健康と環境」については，社会的な弱者である子どもの健康や環境について興味をもちやすいことが考えられる．次に多かったのは，「先進国の進んだ医療技術・システム」であった．国際交流および海外の保健医療看護事情について関心をもっていることにも「諸外国の先進的な医療システムの理解」が関心の高い項目としてあげられていた．このことから，諸外国の先進的な医療システムの理解に関心をもち，先進国の進んだ医療技術・システムを学びたいという国際的な視野をもった学生の能動的な学習姿勢がみえてくる．

中越ら[4]は，わが国の看護基礎教育学，助産師教育学における学習目標は明文化されていないことをわが国の国際看護学教育の課題として指摘している．また，必修科目としての国際看護が学部教育の授業科目として定着してきていることが推察され，共通した学習目標の明文化は重要な課題[7]とされている．大学生の学びたい期待に応えつつ，共通した学習目標を教授する側とされる側が共有することで，より効果的な学習になると考えられる．

３．海外体験と効果的な教育方法

在籍する大学が企画している海外研修の認知度は高く，半数が「興味がある」と回答した．また，海外研修に参加希望するか質問したところ，「参加したい」回答した者は約半数いた．「どちらともいえない」と回答した約３割の中には，参加したい学生が潜在していることも予測され，半数以上が海外研修に参加希望の気持ちがある可能性も考えられる．しかしながら，調査年度に実際に海外研修に行った大学生は，１名であった．海外体験は国際性を備えた看護職の育成のために効果的な教育方法であることが示唆され[7]ており，体験の共有化を授業で行うことは学習効果が高いと考えられる．実際に，「協同学習は，学習者間のコミュニケーションの活性化を通じて，他人の経験・意見から学ばせたり，自己の考え方を見つめ直させたりするのに適している[9]」とされ，その学習効果は問題解決能力の育成も期待される．

海外研修の内容の希望について 11 項目の選択肢の中から複数回答を求め，回答の多かった順に「医療福祉施設の訪問・見学」「ボランテイア活動」「現地の人や大学生との交流」「文化体験」「訪問先国の医療・福祉・看護事情に関するレクチャー」などがあげられた．入学して間もない時期に調査しているが，訪問国の医療福祉施設やボランテイア活動に関心があることは，多くの大学生が看護師になった将来を見据えて返答していると考えられる．

続いて多かった「ボランテイア活動」「現地の人や学生との交流」「文化体験」の回答からは，学生が参加型や行動型のアクティブな研修内容を望んでいることが明らかになった．看護の場面において，看護師は自分の目や耳や手を使って患者の情報を収集し健康についてアセスメントすることが重要視される．同じように，学生が自分の目や耳や手を使ってボランテイア活動，現地の人や大学生との交流を行うことは，それまで自分の中になかった知見を得て，視野を広げる驚きの機会となることが推測される．

さらに，現地の人々との交流や文化体験をしながら，日本とは異なる国や地域，民族間の看護の現状を理解することは，学生の国際感覚の育成や看護観に大きな幅を持たせることにつながると考える．

レイニンガーは，著書の中で文化背景が異なれば看護ケア実践が異なることを明らかにしている．また，サンライズモデルを用い

て，異文化看護の重要性を説いている．在日・訪日外国人も多くなり，日常的に多国籍の人々へのヘルスケアが求められ，グローバル社会における人材育成が急がれている．

４．将来的な希望と国際教育交流プログラムの開発

調査時点における将来の海外活動の希望についての回答は，「希望する」13名(19.4%)「希望しない」28名(41.8%)「わからない」26名(38.8%)であったが，今後，国際看護活動について学びや経験を重ねると変化する可能性が十分にある．将来希望する活動内容については「医療看護研修」「語学の習得」「看護師免許の取得および就職」などがあげられた．

諸外国に比べると日本の大学における国際教育交流プログラムの開発は遅れており，大学生の関心を海外留学・研修に向ける努力が欠けていると言わざるをえないことが指摘されている[10]．将来的な希望は，学習経験の中で変化していくものである．重ねていく学習経験の選択肢の中に，参加したいと思えるような国際教育交流プログラムがあることは，学生の成長と活躍の可能性をより大きなものにしていくことが期待される．在籍している大学が強力に進めているフィリピンなどとの国際交流活動は，学生にとってモチベーションを高めるタイムリーなプログラムになっている．地域性と文化を踏まえ多国籍の人々へのヘルスケアに対応できる人材育成を目指すには，国際看護学に関する学習ニーズ，学生がイメージする国際看護活動の在り方や授業内容，大学生自身が期待する国際看護活動が含まれた国際教育交流プログラムについて，今後も調査と検討をしていくことが必要である．

Ⅵ．おわりに

今回の調査により，A大学の学生は在住県内の同世代平均に比べ高い海外経験値があり，半数以上が外国語の検定資格を得ていた．しかし，外国語の会話能力は８割が話せないと回答し，自己評価が低いことが明らかになった．海外の保健医療看護事情について関心をもっていることは，「世界の看護の現状の理解」が最多であった．期待する授業内容は「先進国の進んだ医療技術・システム」が高い項目であった．国際交流および海外の保健医療看護事情について関心をもっていることにも「諸外国の先進的な医療システムの理解」が関心の高い項目としてあげられていた．海外研修への参加は，約半数が関心あると答え「医療福祉施設の訪問・見学」「ボランテイア活動」「現地の人や大学生との交流」など，参加型や行動型のアクティブな研修内容希望していた．

多国籍の人々へのヘルスケアに対応できる人材育成の有力な手段の一つとして次のことが示唆された. 1つには学生の国際看護学に関する学習ニーズ, 2つ目は学生がイメージする国際看護活動の在り方や授業内容, 3つ目は大学生自身が期待する国際看護活動が含まれた国際教育交流プログラムである．

Ⅶ．謝辞

本研究にあたり，調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます．

なお，本研究は学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金)研究等補助金の助成事業を受けた「看護基礎教育における国際看護学教育の教育プログラムの開発」の一環として行った．

本研究の一部は，第37回日本看護科学学会学術集会において示説発表した．

引用文献

１)中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて(答申)，文部科学省，2008
２)大学における看護系人材の養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材の

養成の在り方に関する検討会最終報告，文部科学省，2011
3)林直子，田代順子，菱沼典子，有森直子，平林優子，平野かよ子：国際看護コラボレーターに必要な能力モデル構築と教育プログラムの開発，Journal of International Health, Vol.23, No.1, 2008，23-31
4)中越利佳，森久美子，田中裕子，野村亜由美，城宝環：わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題，愛媛県立医療技術大学紀要 11(1)，2014，9-13
5）久保宣子，山野内靖子，蛭田由美:文献から考察する看護基礎教育における国際看護学教育の現状，八戸学院短期大学研究紀要，42，2016，69-77.
6)http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html 法務省(2017 年 2 月 9 日アクセス)
7）災害看護学・国際看護学　看護の統合と実践，医学書院，2015
8)基礎看護技術Ⅰ，医学書院，2015
9）中井俊樹，佐藤浩章，小林忠資：看護現場で使える教育学の理論と技法，メディカ出版，大阪，2014
10)www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/__icsFiles/.../201407otahiroshi.pdf(2017 年 2 月 9 日アクセス)

執筆者紹介（所属）
久保　宣子　八戸学院大学　看護学科　助手
蛭田　由美　八戸学院大学　看護学科　教授
山野内靖子　八戸学院大学　看護学科　講師

表1．海外へ行った経験の有無

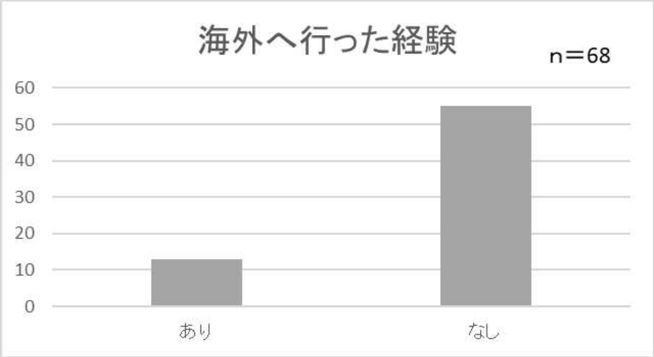

表2. 外国語の会話能力

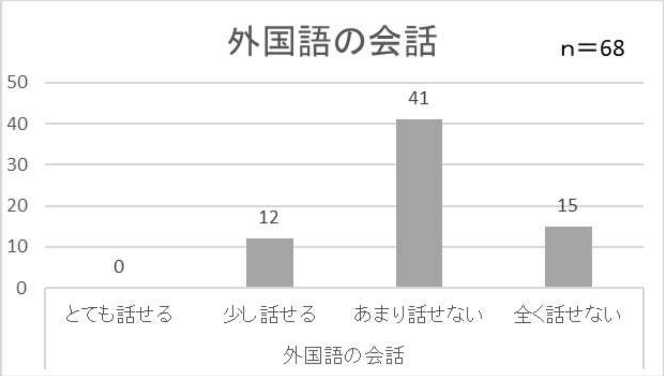

表3. 海外への関心

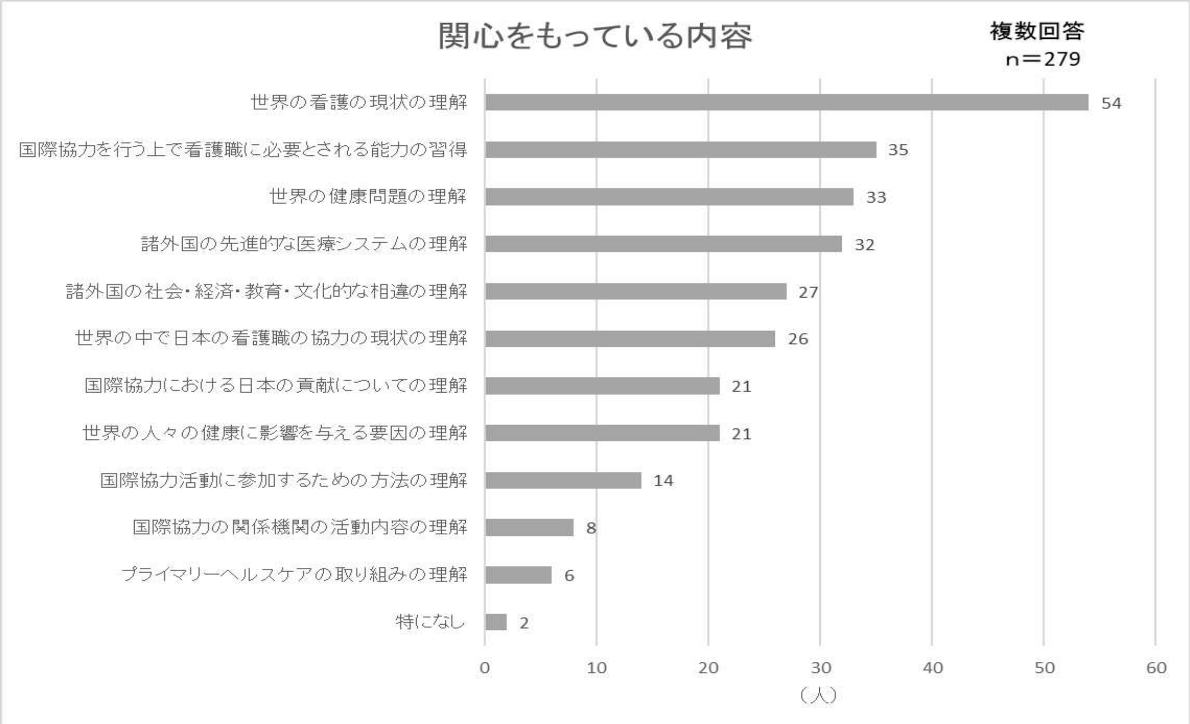

表 4. 授業への期待

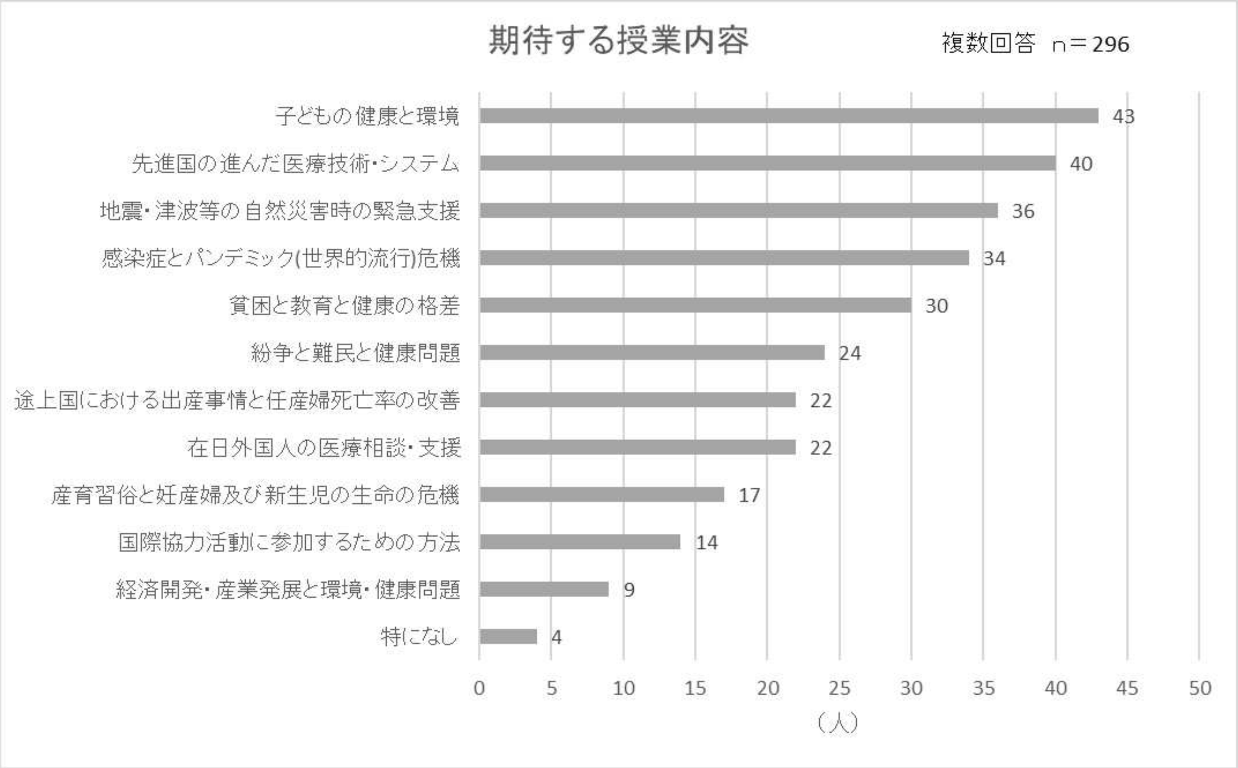

表 5. 海外研修参加希望

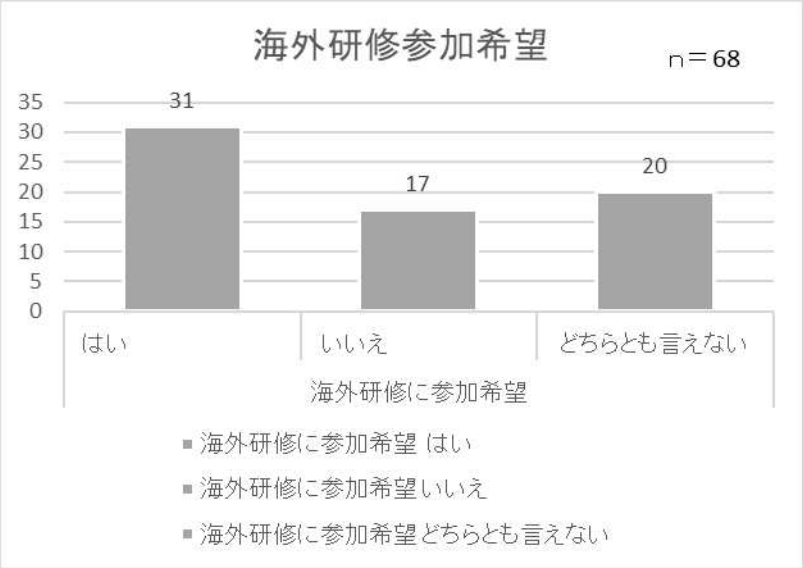

表 6. 海外研修の内容の希望

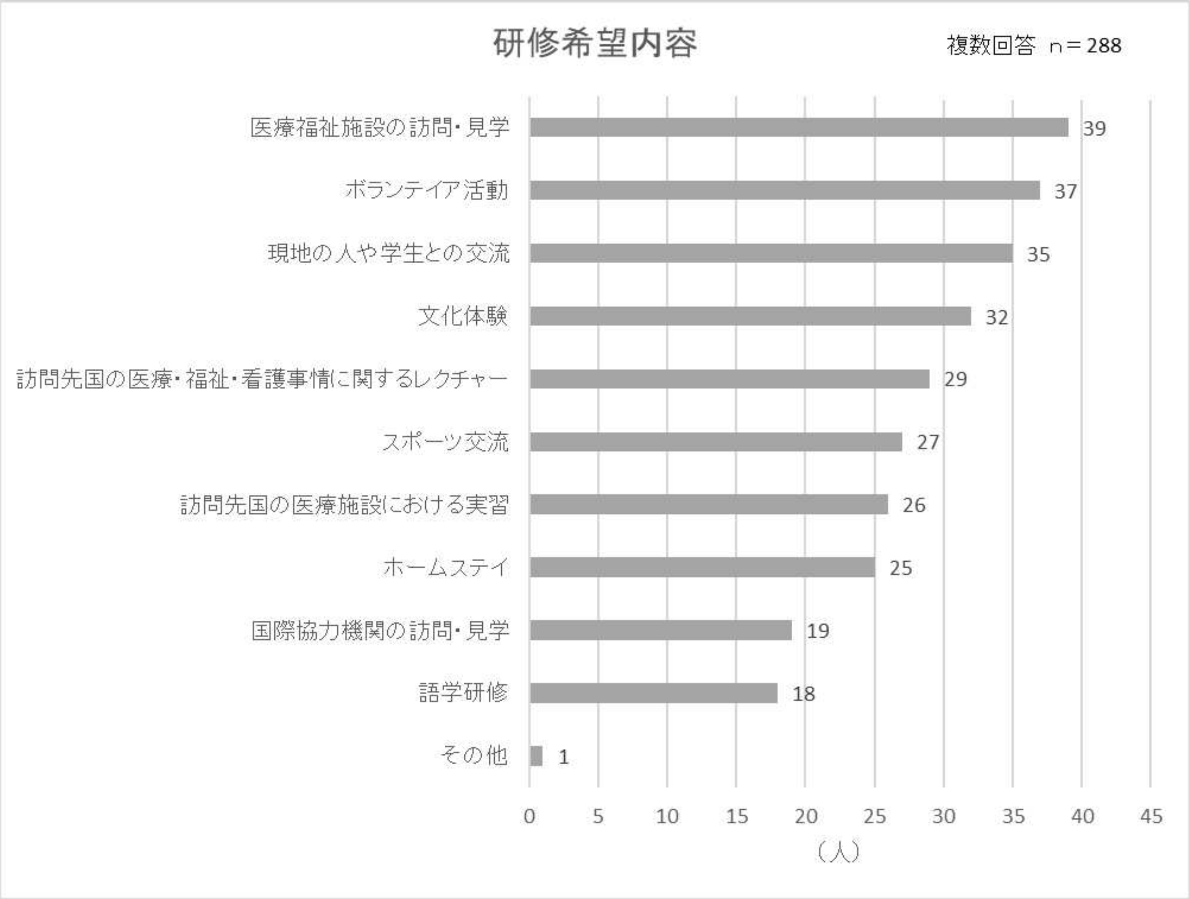

表 7. 海外での活動への将来的な希望

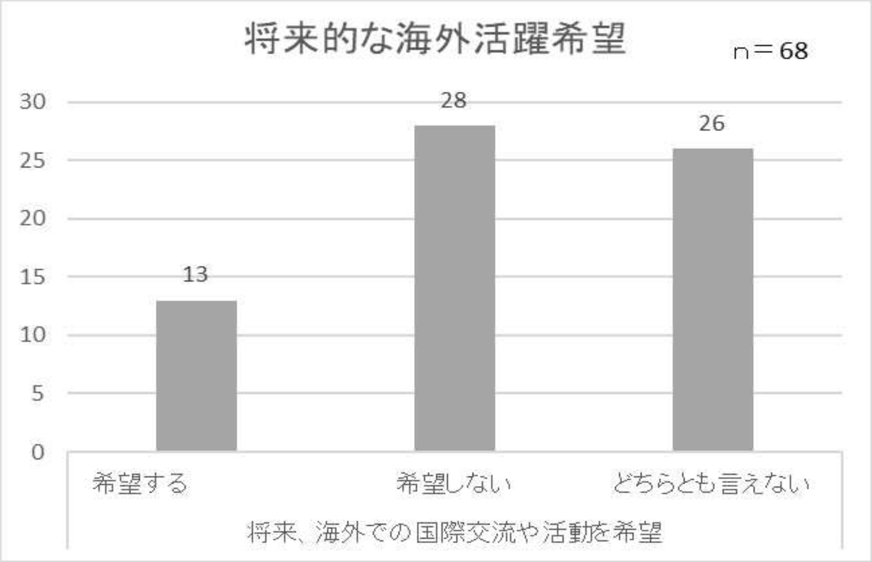
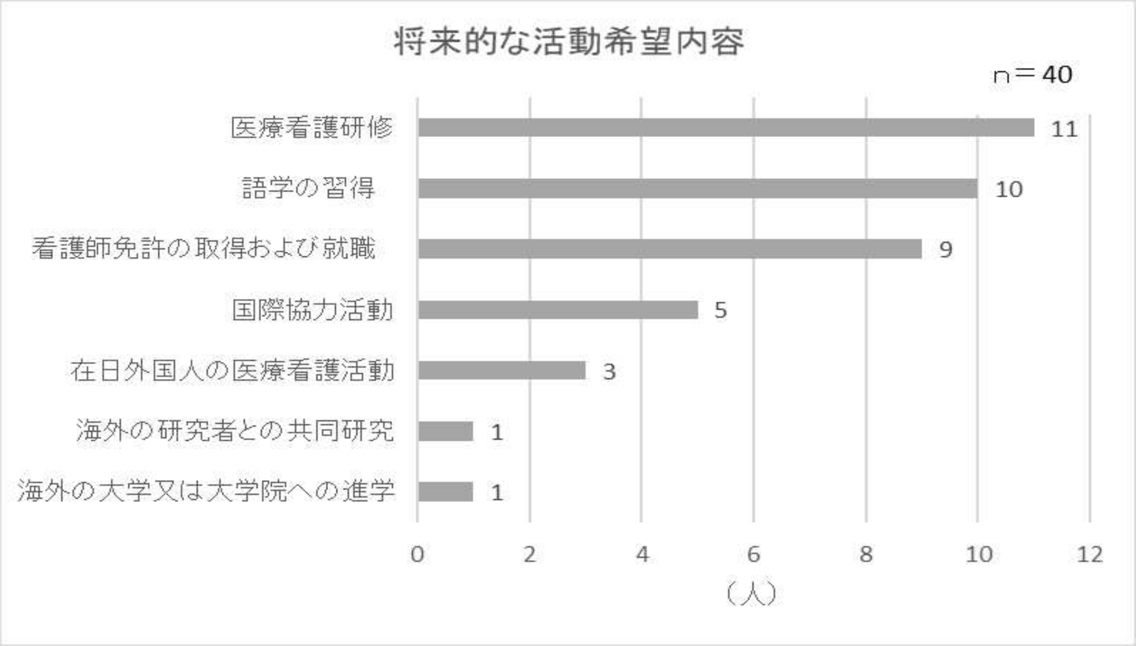
表 8. 将来的な活動希望内容